

# ベオグラード大学における多読時間に対する意識

高橋 亘（ベオグラード大学）  
wataru.takahashi@hotmail.co.jp

## 【要約】

本稿は、ベオグラード大学で実施している日本語多読時間についての意識を調査したものである。参加者から得られた回答をもとに、参加者がどのような点に参加者は多読の良さを感じているのかを挙げ、考察するとともに、魅力的な多読時間にするための更なる課題を探った。結果として、多読は日本語学習の動機づけになる可能性などが示唆された一方、リラックスできる雰囲気を作ることなどの課題が明らかになった。

## 1. はじめに

本稿は、ベオグラード大学（以後、「本学」とする）で行っている日本語多読時間（以後、「多読」とする）に対する意識について調査し、参加者が考える多読の良い点を明らかにするとともに、今後の多読の取り組みに対する課題を探るものである。まず、本学における多読時間の現状について、そして、多読に関する先行研究について概観する。その後、参加者へ行った調査をもとに、彼らが考える多読の良さとは何か、そして本学の今後の多読時間の課題は何かについて探っていく。

### 1-1. 研究の動機と目的

本学では、2010年より多読を行っており、学期中の授業時間外に年25回ほど、週1回2時間、ベオグラード市立図書館にて実施している。この取り組みは、①日本語学習に対する動機づけになってほしいということ、②日本好きを増やし、日本語学習を楽しく進めてほしいということ、③授業で学んでいる日本文学を原書で読めるような環境を作っていくこと、という3つの目標を掲げ、実施している。多読で使用する書籍には、『レベル別日本語多読ライブラリー にほんごよむよむ文庫』シリーズをはじめ、参加者が好みそうな雑誌やマンガなど、全て日本語で書かれたものを毎回50冊ほど用意する。『にほんごよむよむ文庫』シリーズは、レベル0（初級前半レベル）から4（中級レベル）まで出版されており、そのレベル毎に未習語彙と思われるものについては挿絵や文脈から推測できるようにしていたり、ふりがなが振られていたりするなどの工夫がある。

時間内では、コメントシートの記入や多読の取り組みに対する聞き取りを定期的に行っているが、「全部はいいです」、「先生、読書はとても必要な時間です。本当にどうもありがとうございます。」（原文まま）などのように、抽象的な回答しか得られず、参加者の意見や要望が把握できないため、教師の視点でしか改善点が見いだせない現状がある。そこで、参加者の多読に対する意見を調査し、参加者の視点から多読の良さを探り、そして更に魅力的な多読にしていくための更なる課題を探るという目的で調査を行った。

## 1-2. 多読とは

NPO 日本語多読研究会によると、多読とは、「やさしい日本語から始めて、わからない言葉は飛ばして、楽しみながらどんどん読み進めていく読み方」<sup>1</sup>、「文字通り、たくさん読むこと」(NPO 日本語多読研究会 2012:10) と定義されている。さらに、三上・原田(2011)では、「第二言語学習において、内容理解を目的とし、楽しみながらたくさん読むこと」(p. 7) と定義づけられている。以上の定義では、「楽しみながら読む」、そして、「たくさん」「どんどん」という言葉がキーワードとして挙げられる。そのため、これら先行研究の定義を踏まえ、本稿では、多読を「楽しみながら、たくさん日本語を読むこと」と定義づけ、論を進めていくこととする。

また、NPO 日本語多読研究会では、表 1 に挙げた 4 つの「多読のルール」を作成している。

表 1 多読のルール<sup>2</sup>

1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで進む
3. わからないところは飛ばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む

本学でもおおむねこのルールにのっとり、多読を実施しているが、参加者が日本文化的な事項がわからず、読みが止まってしまう際には、参考資料や映像を提示したり、本の挿絵を示したりしながら、参加者の理解を促している。

次に、多読に関する先行研究を概観する。英語多読については、Krashen (2004)、デイ (2006) に詳しい。酒井 (2002)、酒井他 (2005) では、英語多読授業の進め方、多読授業での注意事項などについて詳しい説明がなされている。また、日本語多読に関しては、NPO 日本語多読研究会 (2012) が、日本語多読授業の進め方や実践報告を紹介し、多読体験者の声として、①日本語の本が読めた、わかった、②こんな読み方があった、③日本語の力がついた、④先生と仲間がいるから続く、⑤本が好きになった、の 5 点にまとめ、多読の効果について述べている。岡田・高橋(2012)では、本学における多読の取り組みの現状についての基礎調査を行った。中野他(2007)、原田他(2008, 2009)、三上他(2010)、三上・原田(2011)では継続的に日本語版グレイティド・リーダー<sup>3</sup>開発と多読実践、付随的語彙学習についての報告を行っている。また、福本 (2004) では、英語における多読の利点が、日本語学習者の日本語力にどのような影響を与えるのかを調査の結果から検証しており、精読を行ったグループに比べると、多読を行ったグループの方が、文字・語彙、及び読解において、伸び率が高かったことを報告している。

しかし、日本語教育の現場における多読に対する参加者の意識に焦点を当てたものは少ないのが現状である。そのため、本稿では、多読参加者の意見を調査し、多読に対する意識を考察していく。

## 2. 調査方法

調査は 2012 年 6 月に実施し、PAC 分析、及び補足インタビューを行った。PAC 分析の PAC とは、個

<sup>1</sup> 日本語教師・学習者のための多読 日本語多読研究会  
<http://www.nihongo-yomu.jp/ja/teachers/t-about.html> より抜粋

<sup>2</sup> 日本語教師・学習者のための多読 日本語多読研究会 <http://www.nihongo-yomu.jp/>より抜粋

<sup>3</sup> 日本語学習者の多読用読み教材 (原田他 2009:71)

人別態度構造(Personal Attitude Construct)の略称である。当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法(内藤 2002:1)である。

刺激文は表2の通りである。日本語の刺激文とそれをセルビア語訳したものを用意し、自由連想したイメージを3×3cmの紙に書いてもらい、協力者にとって重要である項目順に並べ替えてもらった。統計処理にはHALBAU7を使用した。調査時間は協力者一人当たり約2～3時間であった。また、インタビューの回答内に出てきたセルビア語と英語は、筆者が日本語に訳し、分析に使用した。なお、PAC分析の詳しい手続きについては、内藤(2002, 2008)を参照されたい。協力者は、多読に参加したことのある本学日本語・日本文学専攻課程の学生4名(3年生女性1名、4年生男性2名、女性1名)である。表3に協力者の背景を示す。

表2 刺激文

あなたにとって「楽しい日本語の多読の時間」とはどんな時間ですか。

これまでの多読の時間で、どんなことが楽しかったですか。

また、どのような多読の時間だったらもっと楽しいと思いますか。そして、どのような多読の時間だったら、自分も友達ももっと来たくになりますか。

そのようなことを含めて、あなたが「楽しい日本語の多読の時間」という言葉を聞いて思い浮かべるキーワードやイメージを自由に書いてください。キーワードやイメージは、できるだけ単語で、書いてください。ただし、それが難しい場合はもう少し長く(10字前後ぐらいまで)なってもかまいません。日本語でも英語でもセルビア語でもかまいません。

表3 調査協力者の背景

協力者	学年	性別	備考
A	4年生	男性	継続的に多読時間へ参加している。日本文学が好きである。
B	3年生	女性	継続的に多読時間へ参加している。多読時間で日本の小説が好きになり、原書に挑戦中。
C	4年生	男性	多読時間に参加していたが、他の用事のため、なかなか来なくなってしまった。日本語学習の動機づけに悩む。
D	4年生	女性	何度か多読時間に参加したが、日を迫うたびにだんだん多読には参加しなくなってしまった。

### 3. 結果と考察

本章では、NPO日本語多読研究会(2012)、及び岡田・高橋(2012)を参考にし、協力者の回答が類似しているものを、多読の良さと今後の課題の節でまとめ、考察していく。協力者の回答は発話された通りに鍵括弧内に示した。回答中の意味が分かりにくい箇所は、筆者が括弧で説明を補った。引用の最後には括弧で、自由連想項目名を示した。なお、協力者の回答にある「読書」は、参加者が普段「多読」を指す言葉であるため、同義として扱うこととする。また、本稿では、全体の考察のみを行うこととし、個人毎の分析については、紙面の都合上、今後報告することにする。協力者のデンドログラ

ム、及び本稿で取り上げられなかった補足質問の回答については、本稿の終わりの資料に示した。

### 3-1. 多読の良さ

本節では、協力者が感じる多読の良さとして、①日本語学習の動機づけ、②仲間と協力して読める、③日本の文化や日本人の考え方がわかる、④実用的な語彙や日本語の使い方がわかる、⑤支援者としての教師がいる、以上の5点にまとめ、考察をしていきたい。

#### 3-1-1. 日本語学習の動機づけ

1-1. で述べたとおり、本学の多読の目的の一つは、多読が日本語学習の動機づけとなってほしいということであった。日本語学習の動機づけに悩むCは、「3年生の時、(日本語学習の)モチベーションがなくなりました。」と話しながらも、「読書のいい点は、失くしてしまった熱心さを生き返らせることです。」(補足インタビュー)と述べている。その理由を、「読書とともに大学生は、日本語だけでなく日本の文学や文化に興味がある。(そのようなものが読めますから)、読書は最も大切なプロジェクトだと思います。読書の時に、いろいろなマンガや雑誌を読める。(教科書ではない)他の日本語も見ることができました。読書の時には、(日本語学習に対する)熱心さを上げることができました。」としている。

かねてから日本文学に興味があったBは、「多読の時間で日本の小説が好きになりました。多読の本は短くした本なので、その後オリジナルの話を見つけて読んでみました。それから、芥川龍之介の本をよく読みました。」(「小説家」とし、多読が日本語の小説を原書で読む動機づけとなったと述べている。

さらにDが「読書の時、学生(参加者)は(友人に)付き合っ(あげたり)、先輩は後輩を助けてあげました。学生と一緒にこの本を読んで、同じモチベーションができます。後輩はもっと上手になります。」(「付き合う」と述べているように、同じ本を読むことで互いの動機づけにもつながるとの回答もあった。以上のとおり、多読により、参加者の日本語学習者に対する動機づけに効果が見られる可能性が示唆された。

#### 3-1-2. 仲間と協力して自由に読める

本学の多読では、一人で本を読み進めても良いし、複数で読み進めても良いことにしている。Aからは、「もし二人で話を読めば、もっとよくわかります。楽しく読めます。その理由は、二人は、一人より、もっとたくさん知ることができるからです。(中略)お互いに説明したら、んー最後にテキストの文章がわかります。」(「二人で」)、Dからは「同じ物語を読んで、物語の印象を交換できます。」(「良い機会」)という回答が見られたように、協力者は、本を読むという共通の目的を持ったコミュニティーの中で読み進めることができるという面から、多読の良さを語っている。また、多読のコミュニティーで、Dは「毎週本を読んで、学生は互いに付き合っ、日本語で話して、もちろん進歩することができます。だから、読書は大切なことです。(中略)学生は話し合っ、日本語の知識を交換して、もちろん本を読んで、私も良い機会です。」(「進歩」と、仲間と助け合える点を挙げている。

そして、Aは「マンガは、たくさんのダイアログがあるので、ダイアログによってテキストを分けたら、面白くなります。えっと、マンガで一人が言うこと、いつも同じの人の文や、ダイアログのパーツを読みます。他の人は相手のパーツを読みます。これは良い方法です。」(「マンガ」と、マンガの

登場人物ごとに役を分け、二人で読むという協同して読むストラテジーについても触れている。

以上のように、多読のコミュニティーにおいて仲間で協力して読めるという点も多読の良さの一つであると考えられる。

さらに、自由に本を選び、自分の好きなスピードで読める点が多読の良さであると指摘している。Aの「3冊の本が読める人もいるし、1冊だけ読みたい人もいます。それは好きなスピードによって違います。それも、多読のとってもいい点です。」（「好きなスピードを求めて読める」）、またCの「例えば、ある友達は読書の時に、早く本を読みます。でも、私はその時そんなに早く本を読みませんでした。それも自由ですね。」（補足インタビューより）という回答から、それがうかがえる。

### 3-1-3. 日本の文化や日本人の考え方がわかる

次に、多読は日本の文化や日本人の考え方がわかるという点について述べる。Dが多読により「いつ桜は咲く」のかや、「東京の交通費はどうか」という日本文化に対する知識が得られ、更にそれを用い、日本人講師や日本人ゲストと「文化の交換」（以上「日本人と話す機会（チャンス）」）ができる点について触れている。また、Cの「日本人の考え方と言いは、多読の本にあると思います。それを学ぶことも読書の目的だと思います。」（「日本人の考え方と言いは」）という意見や、Bの「江戸時代についての本を読みました。（江戸時代の）女性がどのシチュエーションでどのように話しているか、武士とか人々はどんな態度を取っていたかわかりました。」（「いろいろな話」）などのような、日本人の考え方や話し方に関しても、多読を通じて学んでいることが推測される。

### 3-1-4. 実用的な語彙や日本語の使い方がわかる

三上（2010）等の一連の研究において、多読が語彙の発達に寄与している可能性について触れられているが、Aも「語彙の発達は多読の重要な効果を持ちます。日本語の勉強のためには、語彙の発達が大事だと思います。」（「語彙の発達」）と語彙力の発達について述べており、その理由を「語彙の勉強は、文法のように複雑な説明を求めない」からとしている。またAは、「私にとって多読の目的は、もちろん日本語で読むことですけれど、古いテキストも新しいテキストも読めば、もっと便利だと思います。私にとって多読は、日本語の練習だけではなく、実践的な使用法（を学ぶ目的）もあります。」（「新しい雑誌」）と述べている。このことから、参加者も多読は語彙力の発達や日本語の実用的な使用法の学びにつながると考えていることがうかがえる。

そしてBは、日本語の縦書き表記についても触れ、「縦に読むのはとても大変だと思います。初めはこのように読むのは難しいです。たくさん読んでみましたが、時間が経つとともにちょっと易くなりました。」（「縦に読むこと」）とし、普段読み慣れない縦書きの文章を読む訓練になっていることがうかがえる。

### 3-1-5. 支援者としての教師がいる

前述の通り、参加者は一人で読むわけではない。教師に対しては、Aが述べているように「読むストラテジーについて相談し」たり、「次に読む本を相談し」たりしている（「自分の勉強になること」）。

また、本学の多読時間は、通常授業外に行っており成績をつけることはない。Aが「先生から成績をもらわない、つけられない、ということですね。プレッシャーはありません。とても大切です。もし、先生が日本語レベルや読み方によって、成績を考えたら…多読はあまり楽しくなくなると思います。」

(「外国人講師から成績をつけられない」と述べているとおり、参加者が成績というストレスを感じることなく、楽しく読書に打ち込めるようにすることも重要だと考えられる。

そして、Aは「時々多読は、純粹に楽しい。あんまり読みたくない時ももちろんあります。集中ができない時ももちろんあります。そのような時…遊びで易しい文章を読んで、多読を受けられるのが良かった。(中略)本が好きな人もいるし、多読は、趣味だけの人もいる。そのような(趣味だけの)人は、多分難しい本を読みたくない。しかし、難しいのは、面白いと思う人もいます。また、難しいところも、面白くすることができます。そんなイメージ。」(補足インタビューより)と、参加者の多読に対する意識の多様性について触れている。また、多読で使用している書籍は貸し出しを行っているが、Cは補足インタビューにて、「ある学生は読書の時だけ本を読みたい。また、ある学生は家で本を読みたい。(多読は)自由があるからいいと思います。自由の問題は大切」だと述べていることなどからも、参加者各々の読み方にも多様性があり、それらを理解し、参加者を見守ることも、教師の役割であると思われる。

さらにAは、「もちろん辞書を使えば早く、知らない言葉がわかります。ですが、直接に翻訳をしないで、考えながら、コンテキストに気をつけて、翻訳が同じようにできます。このように、自分でわかります。」「(辞書を使わないで読む)」と辞書の使用について触れ、辞書を使うことなく大意がわかることについて触れている。辞書の使用については、「読みながら始終辞書を引くのは楽しいことではないうえ、集中が途切れてしまう」(デイ他 2006:154)ため、そして、この時間は授業ではなく、楽しく且つたくさん読む時間であると気付かせるため、おおむね前述の多読のルールにのっとり、分からない箇所は飛ばし、前後の文脈や挿絵を見ながら推測するように、そして辞書は引かなくてもよいと指導している。また、本の理解度を問うテストや、とうとうと教師が説明をしてしまうと、本を読む純粹な楽しみを奪う恐れがあると、酒井他(2005)が指摘しているとおおり、本学では参加者が一冊読み終わった後に、本の感想や大体何%ぐらい理解できたかを聞くことにとどめている。

多読では、「無意識に様々な言語処理を行い、言葉を身につけていっている貴重な時間」(NPO 法人日本語多読研究会 2012:22)である。以上のような考えをもとに、本学では、教師が教えないことも大事(酒井他 2005, NPO 日本語多読研究会 2012)にしている。一方で、前述のとおり、参加者同士で本を共有して読み進めること、そしていくら考えてもわからない文化的な事項については、補足説明を行うことにしている。どこまで教師が参加者に教えるか、及びどこまで教えないか、その均衡を保つことこそが、難題であるが、多読には必要であり、多読の実施の際には非常に大切ではないかと思われる。

### 3-2. 今後の課題

次に調査協力者が考える多読の課題について、協力者の回答から①リラックスした雰囲気作り、②宣伝方法、③多読後の活動、④その他の4点にまとめ、考察をしていきたい。

#### 3-2-1. リラックスした雰囲気作り

Dの「楽しい気分のおかげで勉強と練習は難しくありません。楽しい気分のおかげで、学生は日本語を進歩させることができます。(通常)授業の後、のんびりして…楽しい気分です。学生は先生と話して、学生は学生と話して、いい雰囲気です。」「(楽しい気分)」という意見がある一方で、Bの「いつも同じ場所、それから明るい、大きい、伝統的な音楽と共に…いい空気ができます。いつでもそのような所

はリラックスしなければなりません。」(「場所」と、多読にはリラックスした雰囲気が必要だと述べている。具体的には、「パソコン、植物、花、クッションがあれば、その図書室は便利になる」との回答があった。さらに、「本だけではリラックスした雰囲気は作れない。読書の集まりがあるから、本は読みやすくなります。」(補足インタビューより)と、リラックスした雰囲気は本だけではなく、多読のコミュニティも大切であると回答している。

### 3-2-2. 宣伝方法

セルビア語での「読書(čitanje)」について、Dは、「読書(čitanje)は広い意味を持ちます」と述べ、「多読の時間はクラスで皆の前で音読することだと思っています。恥ずかしいので、そのことはやりたくないです。みんなは怖くなります。もしそうだったら、私は家に帰ります」(「better presentation of the course」)と答えている。その対策として、「読書でどんなことをするか、詳しく説明をしなければならない」ことが、明らかになった。これまでポスターや、通常授業にて、多読についての広報を行っていたが、これらの指摘を踏まえた広報を行うこと、さらに多読開始後にも、「多読の目標と理念を完全に自分のものにするまで、多読を行う期間を通して、いろいろなやり方で適切な間隔をあげて、継続的に何回も行う必要」(デイ他 2006:151)があり、多読の内容や方法を更に周知させることが課題となった。

### 3-2-3. 多読後の活動

多読後の活動として、自分が読んだ好きな本を他の参加者に紹介する活動を定期的に行っている。Bは「好きな本を読んでから、その本について話すことです。それは、単語を覚えるのにいいし、会話が上手になるのにいいです。これは毎週することは必要ではないが、例えば一か月に一回、した方がいいと思います。」(「好きな本のプレゼンテーション」)と答えている。またDは、「ある本を読んで、自分の印象を話したら、たぶん他の学生は同じ本を借りたいと思います。」(「モチベーション」)とし、この活動を肯定的に捉えていると思われる。同じくDは、「新しい本を読むとき、好きな本を読むとき、たぶん学生は自分で日本語で短いテキストを書きたい。本を読んでインスピレーションを感じます。」(「創造性」)、「本を読んでも面白かったら、空想は広がります。もし学生はおとぎ話を読んで、それが好きなら、もちろん空想は広がります。おとぎ話の主人公を書きたい。絵を描きたいイメージ。」(「空想」)と述べており、多読は自由に作文を書いたり、絵を描いたりする活動にも広げられるという示唆が得られた。

デイ他(2006)は、多読後の活動の効果を考える際、①この活動は読むことを学生の人生や経験に関連づけているか、②この活動は学生が自立した読者になる助けとなっているか、③この活動は読者がほかの読者を支え、支えられることを可能にするか、という3点を達成していれば、健全な自然な活動である、と述べている。この問いを考慮した上で、多読後の活動を考えていく必要がある。

### 3-2-4. その他

協力者からは、実施時間や多読で使用する書籍についての回答もあった。まず、実施時間についてCは、「1週間に2回か3回の時間があったら、良いと思います。週末もいいと思います。」(「時間」)、「先生も学生も授業ではない時にしなければなりません。先生もああ今日も多読か、と悪い気持ちで読書へ行くのは悪い。」(補足インタビューより)との回答があった。現在は授業外に有志で多読を実施し

ているため、A「4年生のとき、すごく忙しくなりましたね。読書の他に、たくさんの勉強だけでなく、いろいろな用事がありました。」(補足インタビューより)などと、日々の授業などに比べると多読の優先順位が相対的に低くなってしまい、その結果、多読に來られない参加者もいることが明らかになった。さらに、岡田・高橋(2012)においても指摘したとおり、D「毎週毎月、新しい本が來たら、友達ももっと來たくなると思います」(「新しい本と新しい雑誌」と、多くの書籍を揃える努力も多読の魅力を高める一つであることがうかがえた。

#### 4. おわりに

これまで、本学の多読時間に対する意識から、参加者が感じる多読の良さ、そして課題について述べてきた。しかしながら、本稿は、本学の多読の参加者4名の回答から分析、考察を行ったものであるため、更に多くの多読経験者から多読について、多角的に意見を聞くことが求められよう。また、本稿では協力者個人に焦点を当てた詳細な分析ができなかったため、今後報告することとしたい。そして、多読と読解能力の連関について調査を行うことについても視野に入れ、研究を続けていきたい。

#### 参考文献

- (1) 岡田さやか・高橋亘(2012)「ベオグラード大学における多読時間の取り組み」『日本語教育連絡会議論文24, 158-163.
- (2) 酒井邦秀(2002)『快読100万語!ペーパーバッグへの道—辞書なし、とばし読み英語講座—』ちくま学芸文庫
- (3) 酒井邦秀・神田みなみ(2005)『教室で読む英語100万語 多読授業のすすめ』大修館書店
- (4) 内藤哲雄(2002)『PAC分析実施法入門[改訂版]』ナカニシヤ出版
- (5) 内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸太一編(2008)『PAC分析研究・実践集1』ナカニシヤ出版
- (6) 中野てい子・原田照子・山形美保子・宮崎妙子・酒井真智子・三上京子(2007)「日本語版グレイデイド・リーダー開発への取り組み—JGR語彙チェッカーの試作と評価—」『思考と言語』107, 31-36.
- (7) 日本語教師・学習者のための多読 日本語多読研究会 <<http://www.nihongo-yomu.jp/>> (2012年11月30日)
- (8) 原田照子・山形美保子・中野てい子・酒井真智子・宮崎妙子・三上京子(2008)「多読のための日本語版グレイデイド・リーダー開発への取り組み:JGR語彙チェッカーの特徴と作品制作における有用性」『桜美林言語教育論叢』4, 57-73
- (9) 原田照子・山形美保子・中野てい子・酒井真智子・宮崎妙子・三上京子(2009)「日本語版グレイデイド・リーダー開発への取り組み:多読用教材等のキーワードの特定とその出現傾向」『桜美林言語教育論叢』5, 71-85.
- (10) 福本亜希(2004)「日本語教育における多読の試み」『日本語・日本文化』30, 41-59.
- (11) 三上京子・原田照子・山形美保子・酒井真智子・宮崎妙子・中野てい子(2010)「JGRを用いた多読の実践と語彙学習」『日本語教育連絡会議論文集』22, 59-68.
- (12) 三上京子・原田照子(2011)「多読による付随的語彙学習の可能性を探る:日本語版グレイデイド・リーダーを用いた多読の実践と語彙テストの結果から」『国際交流基金日本語教育紀要』7, 7-23.
- (13) リチャード・R・デイ、ジュリアン・バンフォード(2006)『多読で学ぶ英語 楽しいリーディングへの招待』松柏社

- (14) NPO 法人日本語多読研究会 (2012) 『日本語教師のための多読授業入門』アスク出版
- (15) Krashen, Stephen D. (2004) “The Power of Reading: insights from the research” Second edition. Portsmouth, NH: Heinemann Libraries Unlimited Inc.

## 資料

各自由連想項目の左の数字は、自由連想項目内で協力者感じる重要度の順位を示したものである。また、項目末の記号は、各項目のイメージをプラス、中立、マイナスの3つのうち協力者が一つ選んだものである。協力者のつけたクラスターの名前は項目の右に示した。

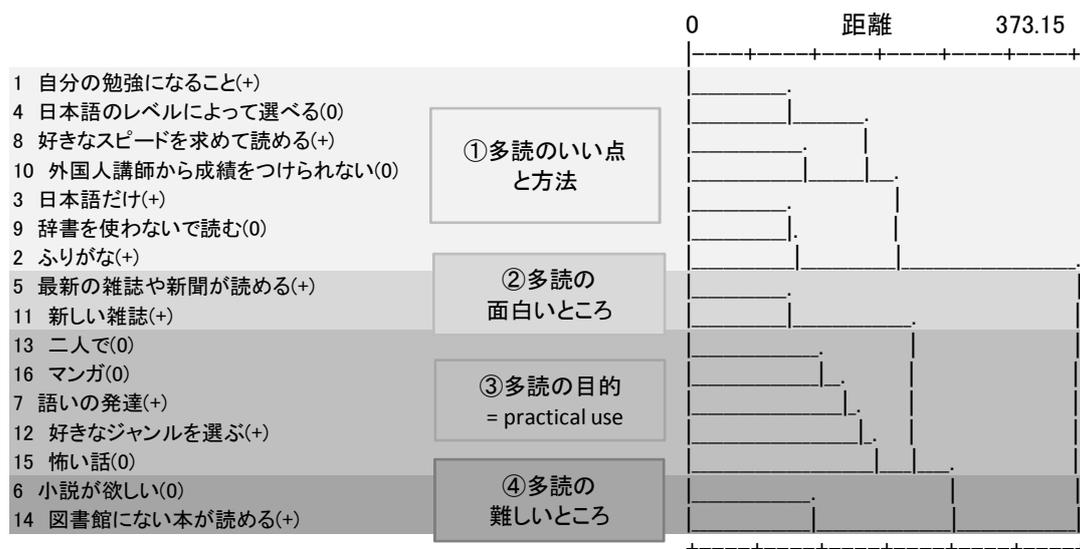


図 1 協力者 A の「多読時間」に対するイメージ

協力者 A に対する補足質問：

「日本語だけ」：読む時も日本語だけ使えば、他の外国語に通訳が、翻訳、どっちでも…日本語の勉強にはもっと効果があると思います。勉強になります。あとは、日本語の書き方や文の作り方に慣れると思います。

「怖い話」：私は一番よく読んだのは怖い話です。初めて多読を受けて、怖い話集を読みました。もちろんそれは私の好きなジャンルですが、他のジャンルも読めるし、私も他のジャンルを読みます。

「図書館にない本が読める」：普通、図書館にある本は、大切なイメージの本、少し難しすぎる本です。多読はレベルが高くない本もあります。

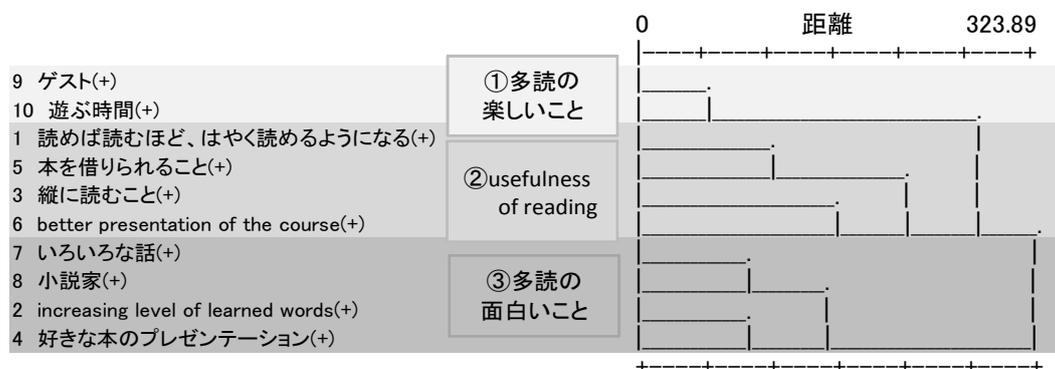


図 2 協力者 B の「多読時間」に対するイメージ

協力者 B に対する補足質問：

「ゲスト」：多読の時間、日本から来たお客がいました。お客は日本について話していました。そのお客とよく話して、んー日本の習慣と日本人の態度について、ちょっとわかるようになってと思います。

「遊ぶ時間」：子供の時に返りました。（多読には）妹も連れて行きました。妹はとても喜びました。日本の伝統的なおもちゃがとても好きになりました。

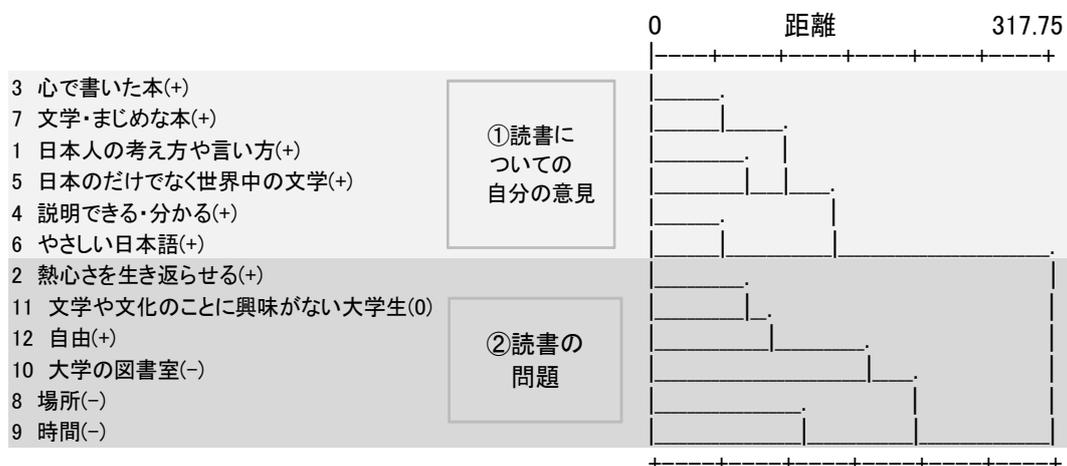


図 3 協力者 C の「多読時間」に対するイメージ

協力者 C に対する補足質問：

「心で書いた本」：私にとって、一番面白かった本は、日本や世界の文学の本でした。そんな本は、心で書いた本だと思います。それは教科書の言語ではありません。文学の本は、心で書きました。そのテキストには、大切なものが宿ると信じています。ですから、そのような本を読むことは面白いと思います。

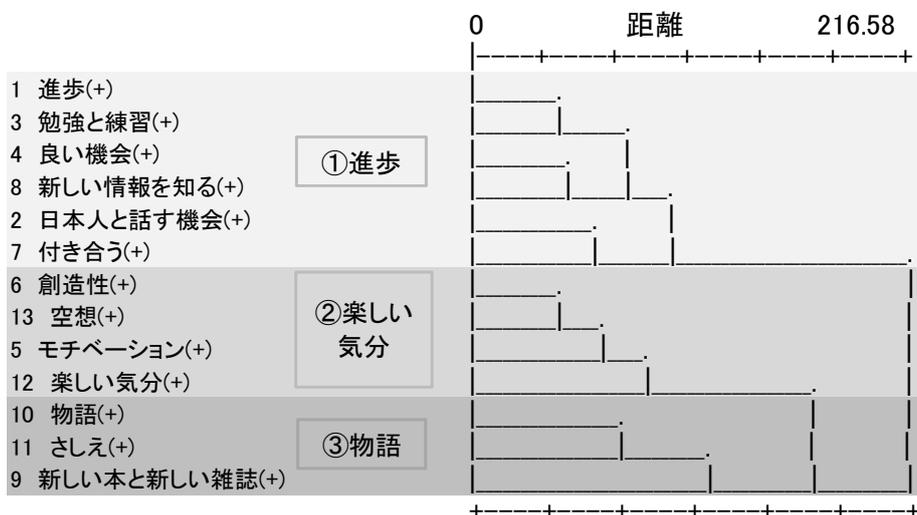


図 4 協力者 D の「多読時間」に対するイメージ

協力者 D に対する補足質問：

「物語」：文学の授業のとき、物語が読むことが多い。読書の時、他の物語を読むことができますから、新しい作家の本を読みます。その新しい作家の本を読む時、その作家のスタイルに触れます。例えば、作家の感情や、書くスタイルなどです。

「さしえ」：本は挿絵があったら、学生にとって読みやすいと思います。ポイントです。私の 1 年生のとき、もし本に挿絵があったら、絵が大きかったら、文が短かったら、わかりやすかったと思います。